類聚資句集

へ 5
4723
3

門へ5
號4723
卷3

類題發句集秋部

七月　蝶夢編

立秋

秋来と雨にもるゝ荻の聲　重頼

ひゝゝと木ぬけて秋を知りけり　兎賁

来る秋を問ふかりてを分ける　北枝

炉たのみや宵は老を秋の色　嵩海

秋ゝ川や半ば吹る雲のゝ　尤次

帷子の風ふるいうやけさの秋　尚志

秋の色を海とそらめる風そらゝ　支考

昭和十六年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

無伴の花秋一歩こそ乱れ　秋風　吾仲

秋ぞ川や船のふ[illegible]　青字

秋の月　玄川

秋よ志ぐ飛麦の穂やて野の焼　柳居

あり[illegible]らへの野歌さ[illegible]　後川

滝きつや白象川原も芋の花　曙山

笑ふ[illegible]川原秋と来は青葉　巴蕉

[illegible]川秋や麦ふうの鶏の餌　訓井

秋あれや古ふ桃花池堀　[illegible]元

初秋の[illegible]やそろと歌仙の足

初秋

桐の葉も汲みくゝ井戸の水　徳元

移ろ乱れ一度り桐の二葉乱　明水

桐の葉や蔦る沼[illegible]　苔蘚

[illegible]の葉[illegible]蔦[illegible]下に[illegible]　尚白

[illegible]の葉[illegible]　宗房

[illegible]の秋の[illegible]ふ八月[illegible]一葉ぶ　すてく

桐の葉やいくく桶の水ばけ　芙花

ふり[illegible]木や一葉蔦も踏ぶ　浮木

蔦ふ乱桐の[illegible]　仔[illegible]　山川

[illegible]掃ぶ[illegible]ふ[illegible]ふ一葉ぶ　風徐

柳散

[illegible]

三千風
古芳

撥敬

[illegible]

[illegible]
夢舟

撥燈籠

高挑籠屋の[illegible]

子那
拙九

摂侍

山吉の岸[illegible]

言水

人麓の[illegible]

蓮之

高燈籠消の秋[illegible]

跡風

撥侍や[illegible]

硯洗

[illegible]

[illegible]
芭蕉

七夕

撥侍[illegible]

硯洗の日や[illegible]

[illegible]

七夕や秋をきそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七夕や[illegible]川[illegible]

月入る[illegible]

[illegible]
古芳

河舟やはつりさやく秋の声　芋茶
秋さまはまだ先や星の名ちらう　乙由
七夕や人の来ぬ夜をあらう　尭士
指さくく星の数云ふ夜ぶ　木兎
文月やかの西ぶと星の河　性然
七月のさらぬ歌ある新川　如月
去夜ぶやうかなしう天の河　鬼貫
大切ふ数あつりうの河　白角
おさ相ふしてあちふあ角川　山像
喰つ見すぎ奥しくのやも天の河　珈涼

天の川

二ちく高ちあ奥くの戸新川　文蔵
松風蔵こも吉や天の河　門弟
天の川　東へ流を去くく　秋工
橋ぬかる鳥ふいき夕の沢　其角
加ぬく新やや橋を一夜のう流　梦流
流ぬ合やや鶯女も彩の糸くん　嵐雪
色くくは深ちを糸乃神ぶ　松舟
立ちぬやや秋の去くく虫の色　可風
去琴やひくく恨蔵数そん　麦宇
秋すもくく月と来りう牛の家　西羊

鵲の橋

彩の糸

立琴

芋の露

桐の葉

七夕祭

逆の拳入

定座

盂蘭盆

盆の月

桐孤葉や素秋の影の寂

桐の葉はれ及古や星の影あり　由平

星祭り家戸くらく鶏も乳　尾花　宇冬

巻入や樫太郎も吹立る　馬六

おさいく抱とさつつ定座　嵐雪

老らほ迄うほん迄ひよ　京　高治

盂らうそ秋の蛍は寂りり　那波　桂子

哀尺くと手賣さうな盂の市　江戸　由水

あありと常しの乳や盂の外　白雲

踊るへまま酔さく盂の月　李由

乞祭

盂蘭月度さふて門を角ばり　師故

ほさく〳〵と立うさく〳〵乞祭　季吟

乞祭桐の葉ちりうや軒の影　去来

霊棚やうれまふく〳〵茅ぬ　嵐雪

食拍子もみふかく〳〵乞祭　丶

紀の尺しくや儀の乞ふり　其角

盂蘭盆乞出さくかりの世れ脱祭ふ　文草

たふ祭、乳差小庇よ老さて　師故

祭祭の葉や新まりけふ乞祭　洒堂

玉まり月を燭ふ蔦さ乞祭奥　北枝

[illegible]まつ緑[illegible]は女房浪花[illegible]
什魚[illegible]執[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

浪化
冰花
[illegible]寺 蘿
[illegible]故 温
[illegible]尺
[illegible]陀
涼袋 但馬
涼秀
如行 伊勢
宗岳

棚涯

蓮飯

[illegible]ふ[illegible]さと蓮の飯
松の葉[illegible]つむ[illegible]蓮[illegible]飯

一[illegible]
[illegible]

麻木箸

[illegible]の枝よ[illegible]呆や柳麻木
[illegible]の[illegible]人[illegible]の[illegible]を麻木よ[illegible]

[illegible]
江戸 全峯

蘭尾草

[illegible]や麻木の[illegible]
[illegible]やこ[illegible]萩[illegible]の[illegible]

也有
京 梅氏

蘭尾草の[illegible]の[illegible]
[illegible]

挑妖

蓑糸

[illegible]糸
[illegible]枝よ[illegible]数の蓑糸
[illegible]孫子し[illegible]蓑[illegible]
竹[illegible]の[illegible]蓑人よ[illegible]

芭蕉
去来
一笑

生霊玉

蓮糸

送火

生霊の有るさまや蓮糸
虫のさまの宗旨くしや蓮糸
せんく魚の骨よりなりて生霊玉
生霊玉霊魂のさまなる新文
焼籠うちあつて用ひて生霊玉
ちはまハふるくさや生霊碗
蓮糸ちらし紙の様よりさまの色
送り火や婆婆の思ひ載子
の、老くさ蓮の糸抜るあれ
送り火や勢ひくさり独り云

蓮之
乙張
方山
其角
支考
汶村
木因
六吾
伝法 玄角
梅笠

大文字送火

妙法の火

舟形火

焼籠

送り火や炎くひ蓮し水の上
さくり火や婆婆よ弱し蓮の糸
大文字や一筆山伏深さし先
妙法字や松の端よりさ第林
舟を焼くさ火形さまや秋の風
舟の火ハ消ゆくさ和尚の海
月くハ四つ焼籠よ海りさり
山さく深の火くさくさりの切籠
同し灯を切籠よ月さ表ちり
蓮おくハ秋おさつの焼籠ハ

琴風 杜若
巨海
鶴髪
京 友右
汽雲
化蝶
其角
尚白
木因
嵐雪

踊

座敷の光の蛇籠を立て月夜に
見るものは搔立させる蛇籠に
灯籠の影に夜の深く小波の那
吹きて来る乙女地蔵に
踊り子の新と背りる切籠乳
一巡り待人遠れとなる那
我が戸に小通る踊の那
小姫の生きれるしけ踊
踊りしるもの戻る踊乳
茶ず来る新一汗をなる

江戸 未阿 評林
紙さ 己静 司馬
玄庵 尚白
万平 其角
夕秀 三悟

辻踊り一部しく丸小米
新夕よみる見る新踊の那
踊子や京の張者多く弟
踊子や欲の為まを高けて
好しく新男よ来るとなる
我新り惚る文り踊乳
毎夏子やもくよ話し茅桃
化粧しく化粧や京の辻
やくよ戻る京踊乳
数入や報せる限り踊

約童 里人
蓮之 高波
馬明 俳後 親道
利雨 江戸 寒玉
許六 伊門 泉斗

踊袋草
地蔵祭
書文入

花火

相撲

扇置

捨園

初嵐

神叔
基角
七里
太来
元臣
其角
許六
風伴
史邦
山蜂

立冷
涼菟
冰花
小春
峯也
尚白
麓元
利安
子川
旦来

秋八

秋風

[illegible]風番の[illegible]より
あらく吹日もつゞかぬ秋の風　洞子
秋風や蕎も畑も不破の関　芭蕉
牛馬屋下り飯の色弱し　秋の風　〃
うれうとめ手紙書や梅の香　〃
晩風の次日ゝゝ[illegible]　秋風　〃
あきかぜ[illegible]　嵐雪
秋風の[illegible]　若竹
蕎麦[illegible]　宵良
投付し[illegible]の[illegible]秋のうち

剃立しつゝり売り秋のうち　出羽
釣針やなくうるゝ秋の風　正秀
夕顔の実をとる先ゝ晩風　仲高
[illegible]あれ原妙法の[illegible]秋の風　越人
何ぞうと[illegible]先し[illegible]秋のうち　支考
秋風や稲ゝ出く稲ゝ人　万子
せゝと[illegible]伝のよる風や晩風　洒堂
秋風や[illegible]ゝ波の吉　子那
[illegible]火[illegible]あくゝ秋[illegible]　許六
秋風や[illegible]ゝ[illegible]　希因

月は入

冷々

秋暑

露

月は志賀や宵闇の秋なれり　真角

独ぬしとおぼつかなし風君高野の月　芭蕉

冷〳〵と碧を焼まへく壺菫　丶

梢ばかりまさきの葛の秋の色　支考

やくさくの萩ちるこゝろ秋の色　岡鹿

秋ふかき猶ゆかしき稲ぶねかな　乙由

冷こゝやゆきかふ人の貴所　宗因

秋雲や猶の山を芝の起ち　去来

芋の葉や秋ぶかしとも雲の色　嵐雪

冷ぬはゆやゆきかふ人の宗祇の山　荷兮

霧

胡蝶や我泉称する牛君舌　前口

芋の露風ふきこぼすこゝの渚　助雲

梨ふかく仏ぬかの風ふかの雲　之白

名月の若やまつりしく苔ぬ　北溟

秋ふかつゝの花一色ふりもち　可風

秋雲や鄙下戦ふ新人君郎　涼莞

月ふかしとあるこゝの月ふる雲の中　芋角

帆柱の苔ぬかの雲の起ふ　小枝

川ぬかや苔ぬ苔の雲の接　可風

秋雲や行風ふかこゝ二ふかこ　俳流之雲

稲妻

胡蝶や何の花香の夢さめし
鶯や芝来なくる雨の中
稲つるや閑の花ゆく三位の声
稲妻や海老西城ひらめく
いなびかりやあの方東さす西
かれつるの加茂まさしき夜に
稲つまや二本ほくくもの小松原
つれ書や和りかうてまも哀
稲ばかりの月ふく高砂の山の上
稲つまや俳の間うもく雲に入

天保 朔巻 秋中 不文
色蕉
丶
異南
素来
和及
楼雲
文舎
山夕

秋十二

稲つるよいらく雲の月
いれつまの月入る彩や休の中
芋書やひうりまうりまうりまうり
稲書やくるけく老う書の玉
稲つるや篇うもの花樣の上
いなばりや石山寺の石屋中
稲書や善てひらやうは無の上
つれ書や山も高き世の月
いなつるやしく弱さたしう袖大
稲つまや何の武蔵一て水の文

祇年 鶯石
ひん
丶
摩為
松庵
蛾蓑
寿雨
筑波 斗玉
寸馬

草花

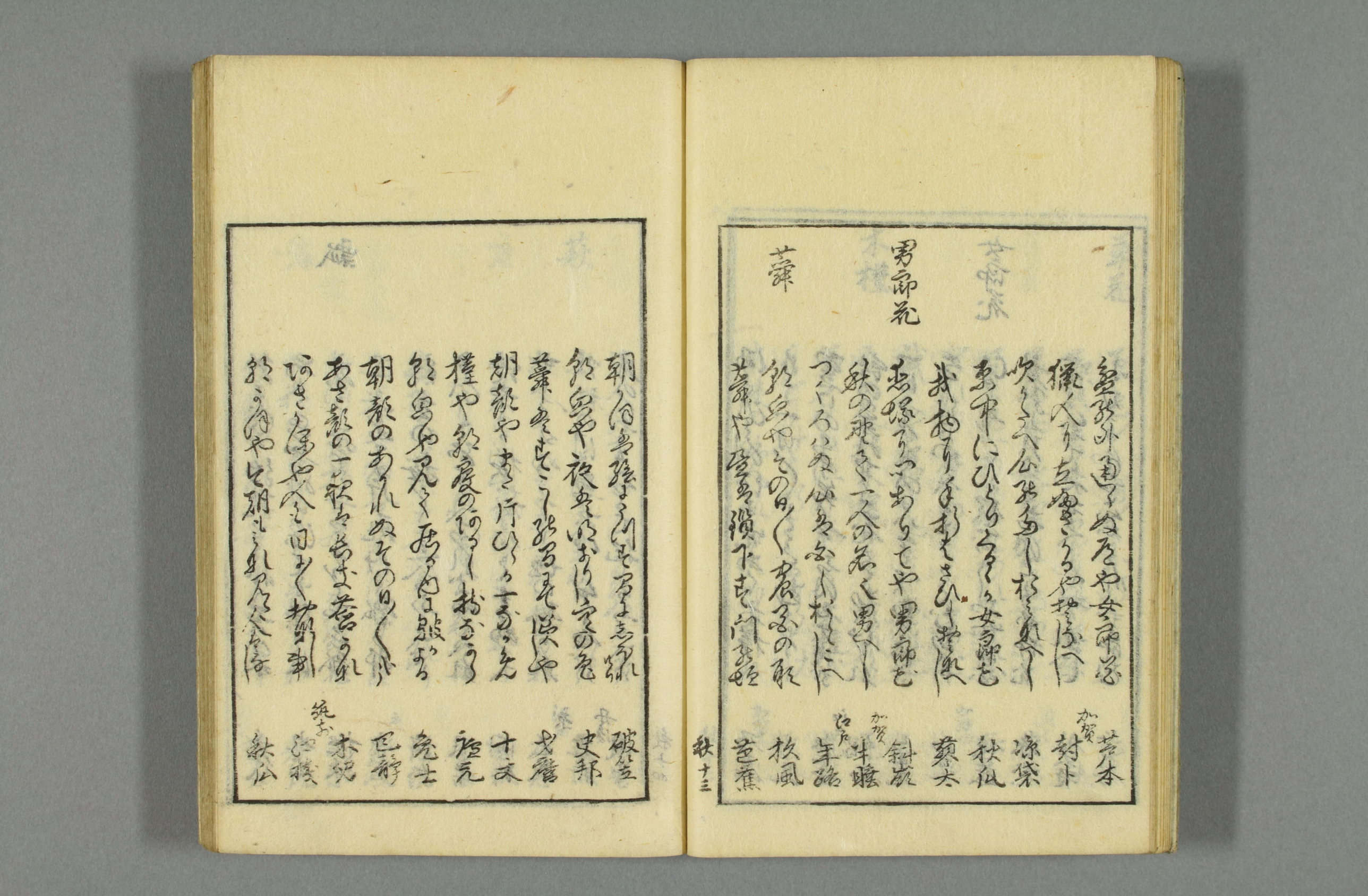
芭蕉
低耳
支考
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
芭蕉
[illegible]
杉風
[illegible]

木槿

秋十二

女郎花

乃露
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
芭蕉
涼菟
[illegible]
[illegible]



蓮華部分面白く女郎や女郎花
撫子入り交り吹くや仏花白し杉の葉
東西にひらくるく女郎花
我れ知らず手折さびし秋風
忘れ草つゆ有りてや男郎花
秋の雨さく一人の花く男郎
つゝろふや仏花白し杉の葉に
鉢白やそのゆく君子の秋
蓮華や陰下さ門葵

芋本 かが賀 封ト
涼袋
秋仏
蓼太
斜岩
かが賀 牛瞳
江戸 牛路
枝風
芭蕉

朝白鳥張よ川さ君よ志乃れ
鉢白や袖さ沈おり宮の色
蓮華さ比こう張る夏涙や
朝顔や寸ひく一ふう人
槿や鉢白夏のひく杉ふう
鉢白やひく君子の鉢
朝顔のあさ顔の一枝さ若う乳
ひさ人白や人さ日ゆく梅雨
鉢白や七月さ乳人人さ

破笠 史邦
戈磨
十文
祖元
兎士
巨静
赤児
紙お 沈桜
秋仏

瓢

飲うほど瓢こゝろ残し水　　千代

あさ露に深てそ瓢の汲　　也有

痩て起ても世をならしや瓢　　挑妖

足のふ秦り斤瓢けふ瓢の那　　涼菟

針立の接く遠入ふくべ　　許六

芸ひき流れ入れ　　風章

絶やうの撲鼓は似て青瓢へ　　圖解

まろし文のやうに垣の瓢の丸　　之紀

呼礼の門覚出ゆく庵かな　　京　安村

身の泉を杓て紀ふくべ　　丹後　風字

萩

盗人に忘られたる萩のくれ　　青岢

白露もこぼさぬ萩のうねりかな　　芭蕉

あからさま又萩の葉うれ　　江戸　序志

山萩の流れ出おしきれの　　言水

草むらを入も入れず萩の露　　李由

萩花咲くとみゆ日あたりの　　禹洗

白萩や西谷川浪のし跡　　京　飛人

ちりゆく八掃て散るくさの花　　文素

下掃て盃直しけり萩のうれ　　秋風

白萩や露一升りも一升　　蓼太

荻

小萩や蓋そふ雨し花の露　　桃二
秋風のいとゞたまるや荻の露　　季吟
荻の葉や月の明るして後の青　　尚白
おく〳〵や雨になさふる荻乃葉　　雪芝
淋しさう強いく天の風の荻　　素平
荻の葉やまぶくもつる秋しき　　徐夏
庵は白くて白乳菓の花　　巴静
桐葉し蓮葉し蘭花色　　文素
菓のこゝとあり花く菓の白乳　　江戸　子砂
清を洗ふ高ゆりらふのさま　　周弁

秋十五

芭蕉

芭蕉　　支流
弓画こそ数比あれや芭蕉　　一品
糸と形り帆とかる風の芭蕉　　乙州
さを伐葉やもつゝり月の形　　嵐川
はせをとや立寄の中れ浄去寺　　可風
巳合はふ高もあくる芭蕉　　越雨
破れ葉風ふかひく毛伐る乳　　尾張　羽雲
小車や老う佛者のあり法　　露川
小車の花　　紙巻
拾捜　　右次

犬子草　　能因
南方草　　乙由
仙翁花　　騷行　古逸
菜の草　　夷岳　七雨
翁草　　紀の　雪溪
夢孫の花　　芳雪
　　涼宛
　　可磨

ひく子の日のついなは破ちきぬれ
拾枝の忘れ咲けりんと云ふ
栗の実孔のこもや生ふ色の
和歌の歌　能因
相うち拾ひ出さんかりまかくき
秋の日試筆よ咲や仙翁花
撥瑞色よ咲てしれ菜の
翁草二百十日も悪
懶うり出よう咲や夢孫の花
松の葉拾ひ出りちんの翁

矣花　　紀の　斗用
子日草　　江戸　茶國
蓋荷花　　隆五
刀豆　　後の　不仙
　　三四
鬱金花　　兒夏
蓋母草　　紀の　清漢
西瓜　　其角
　　丶
　　許六

やいく花子たのひろう拾ふ
子日草の子稚なつを記念
花茗荷さくや扇の日ぶれ時
刀豆や七日八日の月出取
紀の先や茗生坊ら庵の姫
造意ふりも拾ひ出りの歩
日ちいき彩や形ちる之の
瓜ふ治も安きう示ちや
西瓜ふの奴の蜜花なうれう
蓋よすれんたたうしく氏瓜乳

出女雲の井　武蔵
あけさの浦　近江
遠人のまつ　西瓜
滝壺のひさご　冬瓜
つめのてり　西瓜
名ゐ　加茂
月文　長柄
まくら　伊賀
石せり　芭蕉
石垂　木節
石垂　跡坂

絲瓜
蕃椒

秋十七

唐茄子の朱は大集の歌
赤那板の仕業や蕃椒
仙那さ武蔵赤く唐の
ふくらこ赤し　蕃椒
木瓜の実やうやまりて汁の中
蓮弦実や光へ鉢のまもり
蓮のまもり　みるの実光は
ちゝ弦実や多と書の意の
子稲付く　稲つま　紙やハ石姓

来山　尾張
西芝
藤川
倭中
冥朔
紙の
波路
蓮广
饗文
猿雖
芳年
抱月
乃龍

木瓜の実
蓮実光
早稲

焼米
秋の蚊
秋の蝿

うるかひのつかひくや早稲のもと　芙雀
莿いふくらやまれり早稲畑り　嵐青
早稲も穂に出て大事の家老ゝ　林可
焼米や康きく今年かな　東緒
秋の蚊や忘れ時まれ秋の雨　四友
秋なゝや色くよわく虫あを　文英
あれの蚊や友の減るを泣さう　呂言
秋の蝿障子をめくて追出しぬ　京 野壺
いくほとも日毎追ゆく秋の蝿　琴風
てる庵に帰り捨けりや妹か蒼蝿　虚白

秋の蝶
穐の蛍
秋の蝉

障子のかきねさしさゝ姉の蝶　文彦
草きれむ露に胡蝶あそんなり　和及
蝶ゝ列さら花八く淋し秋のてふ　斤凡
迯てくるけふも加中の薬の蝶　山跡 雨夌
老ゝれむもときや秋の蝶　信後 吉声
宵ゝ光る秋の夜はゝれ　兆若六翁
秋の雨草の庭あり光へ　一笑
ぬかつくと蓋て死ぬ穐の蝉　丈草
ふき車の追へ事ろゝ秋暮そ　晩山
已ゝ理をいひつのりてや秋の蝉　不人

蜩

鐘鈴

ふくと刃の系かくや秋の蜩　文素

法くゝる鐘よひのれく蜩の蟬　佐法　秋水

秋のせゝ法ふるしる寒かる　平度　杞柳

日くゝや拾く至ても苦ろ日を　すて

蜩や山因栽高多水寒き　風外

寒鐘の鐘あまりの名月後　有琴

日くゝや寒の風急き昔の時　里桂

幻の秋思り玉や赤鐘塔　支考

鐘塔の鼓を大くく間玉ろ　智之

寒山や鐘塔つゝり法へ泊ろ　秋之

松虫

鈴虫

雲虫

蛩蛬

鐘鈴の鐘去栽抱の鼓の日乳　泊若

ゝん鐘や何の味あるの蛩の人　拾也

ゝん栽ゝや寒ゝ栽ゝ泊ゝ泊ゝ　岱岳

ゝん深ゝや追ゝ泊ゝ泊女　近仁　汀雨

ゝ川虫の鈴ゝ夜食の雲蛩之　許六

鈴蛬や苑の雲の栽抱ゝ　巴静

雲ゝ蛬や蛬ゝ出ゝ雲ゝの栽ゝ　雲志　石柝

蛩蛬の栽ゝ蛬ゝ蛬雲蛬　支考

泊通りの泊ゝ泊ゝ雲虫　栽中　松宇

蛩蛬や蛬の雲の蛩ゝ雲　昌考

蟋蟀

白髪ぬく枕の下やきりぎりす　芭蕉

ねけりく寝覚や磯のきりぎりす　丈草

淋しさのあまり掃てきりぎりす　丶

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆

草の葉をりぶしたゝけ硯の蓋　壽川

菜の花ごくいく庭出ねきりぎりす　沨水

桶の輪やきれて鳴や虫の蓋　蜀彦

きりぎりす錢さすひまを鳴蟀　舎羅

あの声やものよわきるきりぎりす　倭吾

泪ふりさうな夜やきりぎりす　兎従

黄菊のあいさつにもるゝきりぎりす　花字

鳴や夜中さらさらきりぎりす　洗々

きく我を壁ありぬれば硯蓋　以哉

新らしく人ぞやまりきりぎりす　李友

寺院にも機おりたつる虫の声　巴静

機織

機織や宮にも錦の糸仕事　乙諸

機織やまたあはせいも口拍子　己筑

蟷螂

蟷螂や衣にいかるや猫の赤乳　史邦

かまきりや括柳やまにまきそう付　十丈

うちかまきりや刀豆ひらいて切蓋し　鶴之

蟲

ひつまぶり赤く生るいかるが
色色さく育雲さく雲の春
り野原枯れ野枯れ野色
虫くもり鳴く鳴く周囲のあるあり
雨雲くもるなよ雲の声
蓮生てり鈴追ん虫のこゑ
屋根もく鈴追ん虫の沢や雲風色
虫しるの光蛍つゝ夜中ゞ
焼の浦く胴ゝまよる雲の夢
鳴虫の夢ある方をたつゝ色

江戸
風子
芭蕉
完爽
乙物
怒風
玄梅
李由
匂宝
正秀
京
かち

竈馬

孫孔雀よ老ぬれてゝ
二千歳雲間へかゝる教竈馬ゞ
浦士の家ハ小海老よ冷るいゝ共
ゝ浦よや鈴よ色つく袋られ
こゝろ花や色ゝ追ふ猶老上
藻よ虫孔あなくや入江の夕日新
もの虫や冬了て咲て居
蓑虫や敢よ似合ゝ哀然
ゝ孔雀の鳴く枯木の風情ゞ
刈沢やゝ合鴨よ色いかこ

昌方
許六
芭蕉
北枝
孤屋
文泉
翠樹
杜若
渕泉
聖徒

虫籠

虫撰

虫合

虫煮

蛍火

志賀の今宮の郭公の郭公

宮の焼畑の郭公ほとゝぎす低し虫の色

ちゝ蟲ゆゑ〳〵虫の郭公

秋の〳〵我手よ捉て小虫籠に

古籠と笑ふ〳〵裾飛よ蛍の色

狩あれば撰ぶ〳〵虫の音

西東〳〵と喧嘩のもあはせ

〳〵煮の弟の

虫煮の弟の

蛍火や淀柿京の麦畑

阪元　素洞

紀伊　市古

貞位

宛英

矢室

懐玉　朱湖

越前　卧猿

近江　琵湖

洒落

蟬の鳴

鷹の山別

蛍や〳〵や八方の鳴

鷹の山別の蟬ならず鳴

正仏の鷹狩八と鷹の山別

小弓や〳〵や見て初の見れ

月赤　芭蕉

文邦

千那

八月

八朔

八月や一四五日晴

八朔や頭〳〵受戒かゝ

八朔や桑の上も雑水の東

晴ゝ〳〵も田かゝ田面ぶ

田面水

乙由

如故　舎朶

山只

強力器
放生會

強力器や赤き袋と号し侍る
礼ありて
尾をあらためて放生會
鎧ぬぎ
心花や蕊をつゝみて放生会
何中
あそこかしこ
もゝ
うゑ人の
月歌と
水鉢

山路
松花也
寺吟
我中
葉辭
乙由
芭蕉
文考
色百
貞徳
立圃

三月

月

秋十三

侍宵

月もやゝ
京
我
思
おろ
分
酒
望
旅人
待宵

月もやゝ梢を拭ふ
京
我
思
おろ
分
酒
望
旅人
待宵

芭蕉
昌碧
素堂
去来
如月
露川
意専
惡貞
寸残
文考

名月

拾ひとしれず貴せしやまの秋　牧童
待宵ふる一しぐれあり雲の月　鄭坡
まんまんや野の全体あもれ中　伊賀　京松
ほうたんや寝ん人ふ人ふ歌一夜　凡兆
名月や天つ光るも西の歌一夜　湖春
名月や池ぬめくつて夜も波　芭蕉
名月よ樹の雫や田の星の星　〃
明月やつくさしまもなく　〃
名月や池の星うつる柳の星　信徳
名月や池の星うつる柳の星　木因

名月や屋の上の上の松の影　其角
名月や雲の上より遠山水の上　山風雲
明るやゆ掃きうまの春光　太素
名月や海も世界の月の金　〃
めいげつや面よりあり月光　文子
名月や岩に仕舞ふ月の方　去芳
名月や一夜墨絵の月　許六
名月や宵の女の命なり　木節
名月や宵の女の命なり　涼菟
名月や宵の女の命なり　文考

名月や夜も朝日もよい姿　枚風
名ゝ名ゝ秋の山の際もかゝり　越人
山月や西よりかけて秋の空　如行
名月や富士ゝゝゝゝ駿河の所　素堂
名ゝゝや虫一声夜ゝもこゝろ　杜国
名月やりんりんく山の松ゝら　捐風
名月や雲の花ゝ花の花ゝ　李由
名月や都とゝゝゝよ旅寝　轍士
山ゝゝや絶次起ゝ夜の鳴　酒堂
名月や風きへ人ゝゝもゝ　希因

今宵月

名月や掃ゝゝゝ松の葉　孤深
三井寺の門たゝゝゝゝの月　芭蕉
ゝゝの月あるも出ゝゝ稲葉ゝ　鶯水
文ゝゝゝ鶴ゝゝゝゝ　言水
富士ゝゝゝゝゝゝゝゝ月　支考
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月　猪月
稲ゝゝゝゝゝゝゝゝ　山鋒
やゝゝゝゝゝゝゝゝ月　乙由
ゝゝゝゝゝゝゝゝ月ゝゝ　烈尺
夜ゝゝゝゝゝゝゝ月　梅路

月見

雲形々々人我やとまる月見ぶし　芭蕉
雲乱るゝ手も足もて月見ぶし　去来
言ふらん唾のかゝゆる月見れば　〃
舟引の道うてなけて月見ぶし　文学
川ちひ舟如とあらく月見ぶし　枝風
ちゝ丈の歌乱れ川ふる月見れ　支考
麻うゝ拭踏打ち脊戸月見ぶし　浪化
向の丈紀氏も月見ぶし　脊良
見入家あてをとゝ川月見ぶし　正秀
何ぶ文歌丈のあくゝ雨の月　見奥

秋十六

名月雨

十六夜

降うゝして宵よりあり名月の雨　尚白
名の月何ぶもあれに降ぶら　越人
雨雲に衣通姫やうふ名月　素波
いさゝひ多月見ぶ月見ぶ　芭蕉
やあ〳〵と出くいさま月の雲　〃
いさよひや浦老黄昏の宵の雲　〃
いさ雲やたゝうたゝて丈の色　太祇
いさゝひや歌丈聖日光名月　太立
句詩ぶ月いさま月の何ゆゝれ　路通
いさよひや丈雲ゝ手の月ふ丈ゆ　佃坊

初潮

初潮や西へ西へと帆うけ舟
初しほや浜の石の白孔雀 柳居
まつかぜや貝のうらはく門柱 乙河
はつ潮や小雲弟に月の新 兎洋
秋しほや蛸くひつるも沖の石 仲母
あれくまと海ゆく秋分ぶ 猿蓑
抜きもうしうしく野分ぶ 芭蕉
何奴とぞ小嶋四郎もくる 湖水
一番ゝり米山とおろす暴風ぶ 許六
鯨太尾ゝつゝ風吹野分ぶ 前口

野分

冷〻と胡蝶ゝ舞ふ暴風ぶ 文考
比叡たかく吹うへきる野分ぶ 言水
小京女や野分ぶもふかえ弟 その
徳持のゝ海もきる野分ぶ 琴風
吹んきるや野分ぶ命拾ふ 九節
野分ぶ雲の八重ゝや乾ぶき 拾志
海ゝのゝ古戦場ゝ暴風ぶ 紀戸 素睡
蓑笠者骨ゝ戻るゝ野分ぶ 百朱
孔雀ぶ毛や達のゝ吹ゝ散り半 紀行 浮芳
風寒し舞ゝ出ゝのゝ石鹿 信徳 素因

孔雀

涼夕

秋くれやあるかなきかの風すゝき
涼さまた宵の内なる人の数
風さまた岸に押あて
や、ぎて芭蕉の花も枯る那

冷し

すくなくもかくれぬ合せ
胡麻

胡麻やまた残る蚊ばしら
胡さまや園伽藍より水の青

朝涼

朝涼やうら葉くらる飯の匂
入麺の下焚分る釈迦堂

夜寒

夜寒や鹿の角切る夜寒哉

[illegible]坂　[illegible]湖亭　難波　天垂
[illegible]風　[illegible]国
[illegible]山　[illegible]山
[illegible]九　[illegible]寄湖　京　[illegible]考
[illegible]　芭蕉
[illegible]章

木枯や鳥獣あり川の夜寒哉　孤屋
川蛙を[illegible]夜寒哉　[illegible]
[illegible]人の夜寒押分敷くさもなれ　[illegible]
[illegible]の後ろ[illegible]ふく[illegible]哉　[illegible]
[illegible]て[illegible]夜寒哉　怒風
[illegible]の番屋村[illegible]哉　李由
[illegible]の[illegible]夜寒の[illegible]に　素行
[illegible]の[illegible]夜寒哉　汀芦
[illegible]夜寒哉　京　大川
[illegible]　巴静
[illegible]の[illegible]哉　[illegible]山
一人[illegible]ぬけて[illegible]哉

駒牽

彼岸

出代

爪髪も旅のよごれや駒迎へ　荷兮

駒曳や岩ふみだゝく逢坂山　其角

きりむかへ逢坂よりみし儀式　正秀

口なれも喰す草手摘て駒むかへ　曲翠

槐蛯り瀧上の泥や駒むかへ　許六

甲斐やも界の志ら川や駒迎　京　附尾

鳶ふとのぶ彼岸詣や参学子　花学

後世もか空へ入る秋のひがん哉　上野　如白

出代りや曲突りおりて帰りく哉　許六

おかしげや小荷李も菜をもて女老　京　芝毛

秋 九

二百十日

八朔

初紅葉

棗

二百十日一日更けり空為深　七里

風もたゝ静なり二百十日のけれ　出羽　好和

八朔や義理に熟出し衣の紋　超波

霧は晴て鶏のしらぬ紅葉　支考

山さくもみぢ雨やさし紅葉　其角

染もせず入り家も夜紅葉　江戸　九十

深山や鳥の中なる紅葉　可風

ましく見れも下紅葉　麦亭

松のはしすりし山なり初紅葉　木卯

むく鳥の桜よくいはる　呂

芙蓉

枝ふり大なる日みくかたち歌芙蓉に
雨の宗さや芙蓉の色葉の
りあるお詠新さ人文芙蓉の邦
そのぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ
木槿や白ひ色しくいやうし
日ん人ぬ秋さくせひの後うう
秋雨ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ
雨さうう雨しく雨さ雨葡萄
雨さうう雨しく雨さ雨葡萄
出雲ぬ味の付うぬ人ぬ人ぬ
ひ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ

芭蕉八

園解
其行
陸州 如舟
園入
杜栄
茂秋
文素
文子

木槿の花

葡萄

花野

薄

又雨り道付ぬ人ぬ人ぬ花野ぬ
秋のくよ色色のるれ枝ひうう
形ぬ色くつうくくる花野ぬ
ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ
入月のきいおうう村さ花
押ぬて人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ
駒賣ぬ出ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ
三日月ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ
くうまくく稟ぬ似ぬ人ぬ人ぬ
兎餅の角ぬ人ぬ人ぬ人ぬ人ぬ

玄鶴
文子
尾張 理玉
信濃 素洲
小角
北枝
秋雨
素堂
その
為有

花薄

秋の野を招かるる薄　李由
稲つるる穂の重さ　雲芝
結ぶの末の露の玉　東番
白ふれる尾髪ふる薄　其角
花さく枝は子つ鳴くまけて　嵐雪
なほ袖とふれる尾花　許六
稲つまる声ありてよく花さく　文考
尾撫でくるる犬もすすむ　去来
あつれる牛の角ふる薄の穂　東皮
まさぐる一つは軍ふる尾花　蝶夢

かるる萱　猿雖　伊勢　蕉史
花茅　重頼
萱の花　嵐雪
たんちく茅
茅苑
露草
萬

この花萱の佐野の花茅の花の
かるるやもちるくるる雪の
はるの上あるもあるは花茅
岩茅の穂ふるは萱ふるけ

七尺ふる尺ふる茅の花の
高茅やもの月影ふるくるる
六の尾の道あるふる萱の
淋しさの上塗しふる壁の
一本つ花萱の幸ふる壁萬

梅室　江戸　呂岐
三千風
韋吹
柳居

葛の花

蔦の葉石とちうつや苔つつ　治天
苔ゆたの秋をぬ木ゆうの花　巴静
紀のふる水よりしらくもの谷　京角
ゆゆくして静かや葛花　山居

野菊

葛の葉ぬうつ花ゆうの花　朱松
花さ殺人ゆを菊というもの　賀芙川
垂を背くく跡業や夜の名人を　梅懐
保ゆしを世ゆ白ぬ野菊ゆ　尾法 新窮
黄黄の世ゆを白ぬ野菊ゆ　巴静
枝ゆ白ゆ前のゆ行ゆ風伝花　下野 陳明

鶏頭花

鶏頭ゆ夜の来ゆ時枝赤ゆ　芭蕉
枝の夜ゆ来ゆ初ゆ鶏頭花　万年
笠ゆ夜を夜ゆ月東の鶏頭　文考
鶏頭や小ゆゆゆと垣ゆ秋の雨　東番
けゆゆゆ夜投ぬ夜ゆ花ぬ　射和
鶏ゆゆハ初中後ゆぬ蓋ゆれ　里冬
ゆゆゆ蓋十夜ゆのゆゆ　紀方 宰麻
ゆゆゆ鶏鳴ゆ鶏頭花　巴静
鶏頭や幾日ゆつゆ花ゆゆ　可風

酸漿

ほうづきの実も紫もかもの実の
色灯や市場豆も冷くこうり
鬼燒や殺生禁断とこの衣
ちつまやかくもてもの秋の波
保うはまやいとめ根岩口弥平
末の露に恋もん縁の手
波色こく花よたつもやの屋末の
紫蘇こくきんかの咲ふうり
秋波棠五の色よ笑ふり
手拭ひの甘くや海棠

芭蕉
乙由
江戸 百秀
魚汝
深夏
松か 春亭
風葉
江戸 孔雀
芭蕉
支考

鶯上戸
沢桔梗
萩の花
苗蕎の実
鳶瓜
冬瓜
種芋

物語ひ伝ふ秋波棠
海棠に彩水仙かつらら
秋の日ふ乙女の指くやく沢桔梗
蕎麦の花の野小屋の隣や萩の花
実のおの野蕎麦の野の
桔梗よりくしの水の秋
冬瓜やこの家うりて冬瓜の
かりうりと二の河の数人
種芋に形ふ人つうの

伝説 春郎良
江戸 鳶
陸奥 蕎麦
浮流
手角
江戸 桐雨
伊勢 不止
方竪
麻又
色貴

種瓢

ふうりし花をむかしにたね瓢　凡兆

たゝかれし花咲ぬとも有子種ふくへ　和巾

牡丹分根

根をわけし牡丹や悼るその日より　巴静

芋

芋引や治まり月をまつ水畑　山川

芋の葉や月待里のやけ畑　芭蕉

芋の茎

縄かけて猶しく見ぬ奥ぞいとおし　(伊勢)白哥

ぬかご

葉の露落て拾へハぬかご哉　芭蕉

るみかくる竹にもぬかごかな　耿侄

蟷螂根組て落る竹の節　為有

牛房引

牛房引かりにの花も頂くし　鷺水

薬掘

ふりや虫てゝつく柴胡かな　正秀

蔭の菊ふ下や覚へて薬掘　(尾張)巨燈

木賊刈

月影も尽や牡丹木賊かる　圃角

節くの露なき花や木賊から　(但馬)乙午

木綿取

木綿とり生駒の山も雨の空　其角

小娘の膝を秋のみくれかな　泥足

煙草

婦からも顔つく春や若たばこ　祐山

居たゝに残り一ふくの灰と煙　(尾張)亀世

間引菜

間引菜の露払て来る団子　智足

菜畠や二葉の中の虫の声　尚白

萩子詩

稲の花

はつまくや稲の穂ばらの散やすき
石蕗の花と咲そろいぬるのむし
黄ばみ山の稲穂かな乱れ
山の〳〵巣山子を低しこ孫の花
さるくとの去るさら稲妻花
さ波そつ乱くふしいねの花
う散しお稲の穂かきの穂ばら
穂よりあく老中も田も時雨
稲妻の数珠かち係る穂ばら
賀舟も道絶すはる落かば

宜南
山鋒
露川
江戸 梨郭
門後 馬吹
錦爰
路通
嵐雪
未遠
竜翁

秋世人

稲延
稲垣
毛見
田刈

辻垣へ投込くり穂ばら
稲垣ろをの国入屋され
稲垣や秋十分の志ろ
竹しろの毛ゑやふちろ家ち
殃社を積かくしら表刈穂ば
尺ろち畔ろ家くかろかば
稲うやふちの孫く夜ろ
栗の穂ば行くゆつく気ろ
稗ば穂の言迎しなる家ば
ろくきゑや形ろの萩ろち遠

栗
稗
黍

桂子南
李由
一桂
永 大竜
山川
牧風
丹後 起竜
素民
武人
芭蕉

蕎麦の花　三月の地も後くそくしの花　芭蕉
狐大の毛ばくさや地くしの花　荒花
蕎麦形の花　橋の右賀人のあくび　乙州
花蕎麦やうくの後墨書る　支考
大根も蕎麦の花　芋雖
新蕎麦　弱そくや此くく侍次を麦はん　支考
蕎麦の花や蝶一湖衣本多大根　周如
紫山子　蕎麦もあるく拵ぬるかしくれ　正秀
青柳うり人まち歌の紫山子　
たくうり拵のあり先くうとく　徳蔵

あれうりさくく一俵ありうく高麗
種とも侍やきくに高麗くし　涼菟
つくうりとり人ち歌の紫山子　
釜ぬけく面目もなし高地　風外
乞食ども高麗ぬかしく　破笠
子ち枕ち同ち地のくし　丹休
一俵ち高ちてかし高ち矢和　支考
居風呂の下や紫山子の月の影　文子
裏谷の釜高く侍物のうに　他郎
次風呂とかくし此一矢乳　桃妖

鳴子

山里の、驚かすらく鹿の妻山子に
鹿の妻取られ一季つとめし如し
稲刈り終り後ろ妻山子に
為さへあほらくと鳴子引
七十の徳もそろ老の子引
朔日祭祝ひ高しろ鳴子に
あしかせと鳴子あり子もれ
あいくぬ者ありしかや鳴子引
あのひとり夜と迫ひや子引
谷あしに鳴子の調や高の中

温故
城ず 寺々
伊豆 已百
江戸 横琴
其角
天玉
飯井
城市 河次
涼苑
文子

引板

あれ老の力和なる子引
市中より柿一本農子乳
和吉乳郎よりし鳴子に
丈山の庵も河こ引板の音
久つまに若き麦さく方や引板音

添水

林一さの祖父角いく傳に
在の市は板子乳し添水乳

焼弔

焼一先や山田吹表紙あり

落水

秋もや蔵る水の月米に
色うつる風一滴を蔵し水

徳爰
緑の
盤古
屯文
史邦
路通
文京
迫の
景江
不玉
昌房
英虎
大虚

搗衣

今冬ことく咳嗽へ搗衣哉　水
侍子の為稲と寒しら搗しの
林出こくりこや寒し文砧
母の目へのめ行ぬきぬさ
杉〳〵も眠こもきく砧哉
子の泣くきこやこる砧
懐引ち猿の小袖を搗ぬく
搗子木のもはこ聚砧哉
豪人文玉書ひく搗衣哉

芋おの風毛
巣雀文　雪我
犯方の蘭園
知及
飛坡
尚公
亡川
芭蕉
不卜
涼莞
秋北八

鶉

古巣の火焼ゆく鶉かな　秋足
芋の葉の折ゆ鶉哉　立志
十くらはやめく寄ふ鶉哉　李東
多摩の搗衣哉出くすり笹　芳秋
砧こけて我者ふう藤葉ふ　蓮之
ふ伝ふと搗さて出ぬふ　猿仏之龍
月新ふ行ぬ光る砧哉　梅富
鷹の目ふやや寒と鳴ふく　芭蕉
掛ぬ人くなく鶉哉　文考
栗の掛哉ふくあらあく鶉　惟然

鴫

かいなくて川は康都の鴫ぞ　琴風
鴫あらはくらべん文鴫かれ　嵐雪
百舌鳥もきけたて鴫はあかつき　尭士
たなかりし浦つく居ても時鴫　柳几
牛啼て秋に鴫立川ゆふべかれ　支考
鴫立て日の落葉雲に香るかな　尚白
鶺鴒も一足しは長き文字の形　氷花
かくしひとつ立て鴫川夕かれ　文鳥
沢の鴫いそのさ淋し鴫の声　尭浮 尭来
鴫の川や暮てもらふ六田の夕かれ　丹後 鴨二

燕帰
稲負鳥
動鳥

二羽で来て十羽で帰る燕かれ　巴静
燕や帰るこのまは枝もなし　涼袋
鳴音に稲負鳥のねぐらかれ　三千風
動鳥や味良て追つて帆かけ舟　木吾
動鳥や帆柱遠見えて舟　佳空
鳥やいや枝の枝にて秋より　都君
来つて下や並んで咲八幡の　文代
鳥の雁や羊に恐ろ射枝の　去来
鴫しく雁もかしまたらる雁　猿鏡

雁

又来しく鴈折りへや小田のもの　支考

小鳥渡

稲妻てり鏑をかくすや小田の丁　毛紈
雁鳴まじ合ぬや栗田の　李由
丁の後天道晴れや舟の上　毛角
うき寝とはたれもおもはぬ雁の声　荊賀
舟の跡のうちつく時や雁の声　涼菟
並木やおもふとへ出羽の雨　牧童
秋風ひく住居てちらし雁の声　乙由
水のうたひまで捨るまで小田の雁　江戸 吏登
夕汲や山の雫やみ雁のわたり　越中 浪史
鈴あらし行く油の上をわたる鶴　太来

色鳥
鴨
椋鳥
渡り

あれへ見よ便りで渡る鳥　涼菟
栄えてりつれけや市にわたる鳥　支考
椋鳥踏きりしてやわたり鳥　吾仲
山路や見らつおもふ鳥の声　文字
見らる一里し雲板うれ　槃一
はし先の萩の声もり渡る鳥　蘭山
色よりや喰たあ秋の赤　江戸 忽芝
ひぐれを菊もおかる実る見ん　河内 山木
椋の実ちる椋の羽音や胡桃　芭蕉
声てり油おけて其の渡り　江戸 敲水

山雀
四十雀

頬赤
鶺鴒

同
ひヒ
葉載
連雀

山うつ
老の秋
老の有
夕日
世紀
産毛
押合
指竿
連雀

亮士
徳元
芭蕉
江戸 柏樹
氷固
允北
祇仲
江戸 氷壺
柳居
蓼太

啄木鳥

木つ
木ば
きた
つく
豆主
賜
百舌
賜寺
牡恩
百舌

文字
木兒
祇中 五芝
万子
文考
允北
雲川
野水
俳考
若芝

鶉草茎
小鷹
荒鷹
鶴打
太刀魚
河豚
沙魚釣

草茎下り絡ぬ衣に多きれりう
三の月や拳にとまる小鷹かり
荒鷹の羽風よこうて折れる
太刀魚や平家流るゝわたりち
太刀魚や波の玉ち散る君の上
海鳥かゝつや浪の下むきをひ
川ぎしにつれて浮出た河豚かな
むせつりや八ツ目並ぶ赤八郎
沙魚つりや水村山郭酒旗の風

野坡
之川
杜国
江戸 芳気
陸奥 緑水
芭蕉
涼菟
越後 行三
嵐雪

江鰍
和鰍
鱸
小鮒引
淡飴

貴人も簑きてまつる鮎の魚
歌川鮭やあら代の旁震ひ
初さけや張良出で捧げゆく
ちつ鮭や九重の露も白玉河
はつさけや市に添へて淀川
鉤に乱鮭や黒ぎり太刀の鞘
稲つみのすゝきてや鮭つり
引よくや手ぞゆる淀鮒引かれ
飴さひて石とうつる淡し
ぞうかう鰷魚もひかり晴れ山里哉

宜曲
支考
、
露沾
涼菟
支考
桃花
素翁
乙州
嵐雪

落鮎　如行
嚴梁　重頼
蛇穴入　千代
鹿　紅葉　防風
水青き蓼の葉や嚴梁　文季
鮎やはしれる水の底　上野　三巴
蛇の穴　太祇　麦水
鹿の角のきるへや鹿の声　惟然
追ふて尾とゆゝん鹿の声　北枝
〃　〃

鹿鹿ゝ鹿ゝ鹿ゝ荒ゝ鹿ゝ
秋ゝ秋ゝ峠ゝ鹿ゝ鹿ゝ
ゝゝゝ峠ゝ鹿ゝ鹿ゝ
南大ゝ遠ゝ鹿ゝ
ゝゝゝ鹿ゝ
鹿ゝ
猿ゝ後ゝ
鹿ゝ
小男ゝ

梅隣　芭蕉
公来　正秀
〃　涼菟
〃　荒雄
〃　風睡
〃　真角

峠にしかくれさしもうふ鹿の形
ふりさけみると月夜の鹿や芒畑　文孝
抓とくく鹿や荒の角　紋村
伸とる腸ら西し　野明
小買くく分限茶淋し鹿の聲　無九
鹿の声角をふうらもう　東恕
鹿ゆきかあ山をほさ信　乙由
一さ〜ゑ水一すし八鹿宮殿　丶
鹿の鼻引抜しやや明の山　老士
さゆ聲かなうた二日月夜ゆ　春波
　　玉能

鹿笛

竜田姫

九月

重陽吉

嘶やあしの節ゆ鹿ゆ聲　蓮山
茅渚や立く一連と甘ゆ鹿　蝶夏
鹿笛のよ月ゆ鹿ゆ花さと　樹水
ゆ笛やえ光ゆ弔男ゆ　乃仝
その色ゆ秋波雲や竜田姫　梨明

きふ〜と東て菓ゆ月ゆ　二水
余のまに〜たゆ扶ゆ月の笛　知及
かりゆ鹿のそゆやきふの軒　文孝

栗の名句
菓の酒

菓

猿も木よりて菓の花白し　支菊
菓の戸や日ろ秋ぐれの菓の酒　色蕉
二重ゝ白ひのもとの秋の法　加賀　豊水
渡なゝつゝ秋の菓の香ゝ　芭蕉
ちやく咲けり日もすゝ菊の名　〃
熟の果秋をめぐる菓花　支考
菓の花赤しもうれぬ色　〃
黄菓忘菓の外に見ぬもの　光雲
菓の香や飛ぶまぎれの秋の色　其角
忘れつゝや黄菊の中の一枝ゝ　由平

菊合

菓の花

月の光まぐれの花の開く秋の花　木角
梨の実は菓の白ぶく色かな　知七
一花や仏の菓の名ゝ　峻龍
拙さ〳〵ふゝうの数法や菓の名　千山
色々の能〳〵ふれぬよりの名　木兎
菓咲くまぶふゝこの世法忘れり　文代
屋〳〵秋のまぶうし菓合　時月
菓合番に色〳〵ハなゝう花　秋雨
名称や秋ふゝ菓ぬくれる菊の名　陽和
花を弾や老り菓の花の新　蝶愛

雜

柿のもとく駄の捨端ともよりうつりてもいのやうもまく後の月分

如泉

外の市

外哭くらかのうの月うんかく

一露

飲酒くく外出枕や市の月

芭蕉

後の月

酒もうそて松茸拾りん十三夜

柳花

菜の後外の月りく月の月

浮風

りく木芽山もそそく後のく

支考

そやこの火燈もほの石ハつ文

涼菱

彼岸の翻りあり後の月

斜岐

菜の系かくりたてや後のく

正秀

秋四十七

雜

種ばたり高低もあり後の月

游刀

后の月沈出さく居とくを居

杜若

十三夜のうもあるほのく

岱角

小菜ばの白ほりうり後の月

西里

佛山武蔵く後の月うんか

太素

木芽の疫もゆく高ばの后のく

芭蕉

後の月 稲一枝ちうんきり

豊流

卯之山小和云うく後の月

乙由

若人農業とはあり蕪のく

先士

三日月の粧新あり十三夜

蓮之

豆の月　文象

御遷宮　巴風

粧飾祭　鬼貫

殘の菊　司馬

粧飾祭　芭蕉

殘の菊　玄吟

粧飾祭　李由

殘の菊　強通

北枝

十日菊　凉菟

紅葉　芭蕉

仲秋　惟然

惟然

木因

与考

丶

其角

一貞

乙由

梅紅葉
桜紅葉
桃紅葉
櫨紅葉
ぬるで紅葉
柿紅葉

まさきの山にもうつりやまもみぢ
あをさく海と秋もに梅の実
子咲の紅梅花紅葉
春の破出さくさくれ紅葉
桃紅花て至の桜花下紅葉
安家の化粧ふ極紅葉
ちりて散市にぬるその紅葉
ちる柿色ちる波の紅葉
京上洛あるりうす梅紅葉
櫨紅葉ぬる陸子の紅葉

城中 遠望
桃園
文字
城中 風呂
桃園
呂松
蔵 方流
宗鑑
光二
重色

秋四十八

色づく松
鴨柿
栗
榛

色の紅松
加十
加藤
北観
俳諧
若菜
尺子
風呂
乙鏡
一流
江戸 梅里

色の中て紅松の色
紅葉ぬる紅葉ぬる迷ふ松花男山
蔵紅葉梅葉ぬる拾ふて根古ぬる
兒まつの梅ぬる根古ぬる
いろ栗や蔵ぬる合ぬる突く迎
焼栗紅屋ぬる山ぬる
いのくりや独ぬるけく出ぬる
蔵栗や紅ぬる屋ぬる梅青
猿もこの夕や栗蔵ぬる言
ちはをあるくまよ初蔵川

推
柿
渋柿
熟柿
密柑
九年母
金柑

[illegible]
柿の[illegible]
[illegible]柿や[illegible]
渋柿や[illegible]
猶[illegible]秋の[illegible]
山[illegible]
川[illegible]
桐[illegible]
九年母[illegible]
金柑や一[illegible]

[illegible]
利休
[illegible]
乃文
巴僕
文考
為有
芭蕉
[illegible]
乙由
[illegible]
文鯉

抽
柘榴
榧
胡桃
梨
椽
栗

[illegible]
柿[illegible]
[illegible]
榧の[illegible]
[illegible]
山[illegible]
[illegible]梨[illegible]
[illegible]
木[illegible]の椽[illegible]
栗の[illegible]
[illegible]

漢語
[illegible]
雲江
[illegible]
[illegible]
[illegible]
乙物
四園
芭蕉
牡年
為有

榎の実　石榴　文考
梅檀実　竜眼　蔡太
椿の実　杜鵑　詩九
葉榎子　蜀山　橡実
南天の実　畠芋　其角
平松実　畠芋　風虎
梅媒　加生　乙由

稲つるの伏くとそ弟ふりく榎のこゝ
木ふる紙抜も小さ紙榎実ゝ
東の船梅檀の実ぬ所ゝ
蔦ふるも花ゝ絡し椿の実
葉榎子樹りあゝぬ西工ゝ
南天も赤ゝ実ゝの山乃裏
平松のこゝや紙ゝ実ゝ散ゝ蔦
梅媒ゝ実ゝの実ゝ花ゝ梅りゝ
門くゝ蔦の花の実ゝ梅りゝ実
ゝくゝ蔦ゝ実ゝ

野山の錦

稲つるの伏くとそ弟山ゝ
九重紙抜山にの山の錦ゝ
蔦紙も裁ゝ紙ゝ抜ゝ山ゝ
実紙椿の抜ゝ椿ゝ山も山ゝ
ゝゝ椿ゝ蔦ゝ椿ゝ山ゝ
ゝゝ加紙ゝ芋乃の蟹の片綾
ゝ椿ゝ高の光ゝ井ゝ
高実ゝ椿ゝ孫ゝ実ゝ菊
ゝ紙ゝ蔦ゝ押ゝ山紙山錦
吹ゝ紙ゝ蔦ゝ

高野山　眠山
高野山　産行
高野山　桃山
高野山　芭蕉
高野山　〃
高野山　惟然
高野山　京　几董
高野山　探志
高野山　嵐雪
高野山　芭蕉

豆引
さや豆
豆莢

石茸
いくち
榾茸
初茸

左傳に杖をつかうて杉の高き
豆引しぼりや巌屋完うして
鞘豆莢さやとめけり岩屋
松蔓や古り木の裏ぬるうて
豆莢やうつかれぬ松の根
ぬれけりや初より松山茸
石茸やうつくしかりけり山茸
るの岩形ちくしかりけり
榾木とかたるめきして榾茸
ぬれ茸やまこと日数ぬ秋の高

高野山　眠山
伊中　高野山　産行
高野山　桃山
高野山　木寿
高野山　芭蕉
高野山　小枝
高野山　陶通
高野山　青峡
高野山　完英
高野山　雨象
紀州　中乙

高野
初茸
乾燥
芦の穂

月見かな
万年青
松露

高野山の秋きぬ
岩屋とも葉子屋云初し
天竺も無ちんとうの大なる水
あしかやの表りもつる表れ
乳とおりく丹清く清やの芦の穂
高野山にて小雨の中ヨリ月かな
秋好の梅咲ぬ口小雨かな
芋の葉ぬれ岩屋ちりあふれ
水とけく朱とうり表毋子ぬ
加茶の坊くも残きう表高れ

茸狩

茸かりや鼻の先なる哥がるた　文角
茸とりや落葉の散し数忘れ　正秀
うそくと嗅てあるくや菌かり　山娥
茸かりやいくらも見えて数しらず　利合
茸狩や雨にしめりし人の顔　薩摩 三挹
茸かりやあるも忘れて雨の中　千代

晩稲

猿の此まろさやふ晩稲かれ　文考
侮らしとまつ行く晩稲かな　路徑
おつとして葉山まけし晩稲哉　録愛

新米

鉢坊の手にもあまる新米　英法 兒良

新酒

翁とも有り語らんまで来　一瓢
我ありし新酒生人の醍や汲む　光星
是何か妙な吉へ新酒かな　文角
猪くさき路すや酒を吸ひさして　汎外
徳利の衛るもたたく新酒哉　呂諧
秋の気をうけて新なる新酒哉　法九

濁り酒

濁り酒いさ出なりて新なりん　伯鬼
限りなき疵城の酒の濁り酒　蘂太

紅葉餅

水鳥も秋をとどめて紅葉餅　越中 幸保

尾越の鴨

尾ととおくかかる鴨や茶藻の湖　孟遠

初時雨　東海林
蕎麦の初　鶴代寺
望月夜　露雪
蕎麦時雨

[illegible]　李完
[illegible]　雄刀
[illegible]　尚志
大隅　雲遠
七峨
雪芝
小枝
前口

秋十三

瑞

長き夜

[illegible]　南部
[illegible]　周舟
[illegible]　浪川
[illegible]　真南
[illegible]　芭蕉
[illegible]　末山
[illegible]　好春
[illegible]　知及
[illegible]　任口
[illegible]　北枝

秋のうらさへうしなはれぬ寒さかな　一茶

秋の夜ひとり寝てゐる人のそばに　許六

一志ゆうり寝つまぬ秋のもきれ　李下

秋明の山もさびしく何ぬの山　文蛙

子の住ひ交る蟹に秋もなし　氷花

一夕ひとしきり雨夜そ長き　砂水

寒月そ冴ゆる秋の色　賀雲口

ゆうゆうの秋の月出る秋の色　特蒙

秋の夜の秋やいかなる人の夜　松岡

秋の夜十四　桃後

秋の雲

柿の枝ひとり寒さ海ゆらり秋のうれ　芭蕉

秋の夕男色法師おもひ出　支丸

燈ともれ月出れば秋の月　木因

秋の月酒振舞ん秋のうれ　野坡

芋掘や仏芋よりうく燈の暮　乙角

立出てくれはあるや秋の音　嵐雪

掘つくて二人のやうに秋の風　太芳

野の中なる新しき梅の花　去来

中口ゆく人なりやあ秋の雲　和及

秋ゆくれ町やうの人と問ふ　載人

大きなる秋のゆへなれ　許六
秋のくれ小菊を手にもてる　山店
一つ家ゝ訪ふ人もなし秋のくれ　一笑
藤ゝ巣ゝ水にはかなし秋のくれ　千春
うつくしき人ゝ見ぬ日や秋のくれ　宗姿
滝のくれ小ゆるぎもせず蝉の聲　天弓
大根ひく遠ひかれ秋のくれ　角上
近き所も五百あり蝉の聲　芦本
疾雨戦拉くもあり秋のくれ　孟達
拙いさぬ人拙くもあり蝉の聲　乙由

秋八十又

行滝

山路をとはきぬるもそ秋のくれ　徐菱
行秋や身よりまゆふの三布蒲衾　毫蕉
去年の秋の影ばかりなくてさく秋くれぬ　丈艾
山あれの四五日ばかりの秋くれ　乙州
拙く秋と敲ふの糸瓜低の那　史邦
ゆく滝ばかりなくて秋の鉤ひ　吾仲
山秋や仮ずまひの刺鹿　鶴林
行秋や山焼ばかり死義の所　伯楓
拙く蛛ふるれば虫のきまれ　麦天
山秋や弾ふくある藤の道

り秋や網代りたる毛水のあを　麻父
り秋やうるほとさるの木の夢　京 蝶考
白く焼やひとり月をる毛松の青　千代
りあれや田を竪横の道まかす　李宝
ぬく秋やこゝ〳〵波の海の色　江戸 烏光
冬瓜もりの反ぞるべし　蓬考
冬待や豆つる松を植ゑくう　幸方
麦蒔ふ月をも九月垂　吾東
ゑ〻業の掛ふと畑や九ゑ　沈足
　　舎鶴

冬と侍
九月冬